

フィリピンをもっと知ろう④(連載)

フィリピンと日本「ミンダナオ島ダバオ開発の物語」



ジェネラルサントス北方にある美しい
マテュチュン山
(標高 2,295 メートル)

前回はルソン島バギオに至るベンゲット道工事にまつわる日本人の汗と涙の物語を紹介しましたが、今回はその後に行われた「チボリ族」の住んでいる島、ミンダナオ島ダバオの開発物語です。

1905 年(明治 38 年) ルソン島の高地バギオ市へのベンゲット道の難工事でも日本人労働者の努力で見事に完成しました。

そのベンゲット道の工事に係わっていた兵庫県出身の太田恭三郎氏は、明治 38 年ベンゲット道建設に係わっていた日本人 180 人を連れてミンダナオ島ダバオに渡りました。そこで農園の開発に取り組んだのです。

その農園で作る作物としては、当時船のロープに大量に利用されていた麻です。ミンダナオ島で作られていた麻はバショウ科の「アバカ麻」で、製品の名前は「マニラ麻」と呼ばれていました。

当時のダバオはまだ開発途上で、先住民族の「パゴボ族」が住んでいました。太田氏は友人の日本人とともに「パゴボ族」の酋長と話をつけて開墾に取りかかり農園を拡大していきました。

やがて、開発のニュースがマニラや日本国内に伝わると多くの日本人が続々とダバオにやって来て、次々と農園を開発していきました。

当時、フィリピン国内では外国人の土地の所有は法律で制限されていましたが、なんとか開発許可を得て日本人の「麻」農園は拡大していきました。軽くて水に強い「アバカ麻」の特性から最大の需要先は船のロープです。その後発生した第一次世界大戦の船景気で「アバカ麻」の価格も高騰しさらに農園は成長、拡大していったのです。

日本人会も結成され、日本人学校、日本人相手の商店も開設され、また日本人の写真屋はミンダナオ島を巡回し、家族の記念写真を撮ってまわりました。フィリピンの人は家族との写真が大好きで商売は大繁盛しました。また、現地の女性と結婚して定住する人も増えたのです。

1935 年(昭和 10 年) ダバオの日本人農園の耕作面積は 5 万 7,000 ヘクタール、人口はおおよそ 1 万 4,000 人となりました。他の米国、フィリピン人の農園と比べ倍の面積となったのです。また、勤勉な日本人労働者は米国、フィリピン人地主の農園でも引く手あまたでした。

この状態を大きく変えたのが太平洋戦争です。1941年(昭和16年)12月8日、日本軍のハワイ真珠湾攻撃で始まった戦争は、当時フィリピンを植民地としていた米軍とフィリピン人の軍人、米比軍と日本軍との戦闘が始まったからです。当初日本軍は台湾から爆撃機がマニラ周辺の航空基地やキャビティ軍港を爆撃して米海空軍を撃破し、輸送船から上陸した日本陸軍はマッカーサー将軍が立てこもるコレヒドール島やバターン半島の要塞を攻撃し、やがて米比軍は日本軍に降伏しました。

ダバオにいた日本人は戦争が始まると全員が米比軍に集められ、家族ともども兵舎や学校に閉じ込められました。しかし、日本軍がダバオに侵攻すると在留邦人は解放されました。

その後、太平洋戦争末期になるとミンダナオ島ダバオをはじめ現地の日本人は根こそぎ軍隊に召集されたり飛行場工事などに徴用されました。米軍がミンダナオ島に上陸すると日本人の女性と子どもたちは山中に逃げまどい、ジャングルの中で餓死したり病死したりする人たちが続出したということです。また、ミンダナオ島に入植した日本人と現地の「パゴボ族」などとの混血児は戦前に約3,000人が生まれていたと推定されています。終戦後、日本人は全ての財産を没収され強制送還されました。戦後も対日感情は悪く、残された現地のフィリピン妻や二世は引き続きジャングルや山中に隠れ住み、二世の多くは街頭のタバコ売りなどをしたりして生計を営んだのです。

戦後、日本とフィリピンの平和交流がはじまり30数年が経過した1981年に、二世らが「フィリピン日系人会」を結成し、ようやく社会で活躍をはじめることが出来るようになったのです。